

ひそかに 読まれている本

『壊れた脳 生存する知』山田規畝子

Yamada Kikuko

講談社 定価1680円(本体1600円+税5%)

Tel.03-5395-3622



壊れた脳の中，教えます

平尾隆弘（編集者）

著者、山田規畝子（40歳）は三度の脳出血に倒れ、後遺症（高次脳機能障害）に苦しみながらこの闘病記を書いた。

37歳で起こった三度目の出血はことに激しく、開頭手術での血塊は直径8センチ、除去すると750グラムもあった。左半身麻痺、食物は呑みこめず、言語能力も著しく低下した。著者は友人たちに「死にたい」と涙ながら洩らしたという。

しかし、「どんな窮地に陥っても、私はただでは起きない」というように、著者はあくまで社会復帰の意欲をもちつづける。本書は何度も襲われる「死にたい」ような状況を、「生きよう」という意力が克服していく記録といえる。だが、闘病記に時として見られる情緒過多な叙述はない。医師である著者は、「科学する楽しさ」を標榜し、自らの病状を医学的に分析し理解するのである。

高次脳機能障害ではどんなことが起こるか。

——記憶障害がひどく、遠近感がなくなる。たとえば靴のつま先とかかとを逆に履こうとしたり、和式便所に足を突っこむ。漢字のイメージが浮かばず、数がかぞえられなくなる。左手が使えないため、洋服の脱着など日常の挙措がすべて不自由となる……。

薬の副作用による眠気とイライラと脱毛とがこれに加わる。こうした症状を読むと、オリヴァー・サックスの医学エッセイ（『妻を帽子とまちがえた男』など）の登場人物が、直接筆をとって読者に訴えかけてくるかのようだ。

著者が繰り返し強調していることがある。脳

の故障は、たとえば身体障害と違って他人が見てもわからない。障害が障害として理解されず、「頭がおかしくなった」「ボケた」「人格が変わった」などと評される。一方、患者本人の知能低下はほとんどない。そこで失った機能可否応なく自覚し、焦ったり、無能感にとらわれて自分を追いつめてしまうというのである。

ここから著者は2つの方向に筆を進める。1つは「脳卒中後、毎日繰り返している失敗にも、必ず科学的理由がある。それを知ることは、自分の障害を理解し、乗り越えていくための大きな助けになる」といった、患者側からの視点。もう1つは、病院、医師、社会、あるいは患者の家族といった環境の側に理解を求める方向。2つが1つに重なることが著者の希望だ。「私の病気が現実に、ささやかな私の人生からいろんなものを奪っていることは間違いない」としながらも、友人や愛息とのふれあい、家族の支えに感謝し、「私の人生もけっこういいもんだよ、と言えるようにしてくれたのもまた、この病気なのである」と書くとき、平凡なようで千金の重みある言葉になっている。

高次脳機能障害では、その人のそれまでの人生が如実に出るという。脳の一部が壊れたとき、脳は残された正常な機能を総動員して壊れた部分を補い、危機を乗り越えようとする。いわばその人の全史が試みを受けるわけだ。それは脳の障害に限られたことではない。私たちの人生のあらゆる危機にあてはまる。その意味で本書は、障害者と健常者の壁を、双方の側から意識化しようとする実践の書なのだと思う。▲